瀧井孝作全集

第八巻

瀧井孝作全集　第八巻
定価四八〇〇円
昭和五十四年四月十五日印刷
昭和五十四年四月二十五日発行
著者　瀧井孝作
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一
振替東京二―三四
©一九七九　検印廃止

瀧井孝作全集　第八巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

気多川と天竜川　一一
喜多六平太翁　一六
新人の文章（五）　一九
芥川賞の作家たち　二八
新人の文章（六）　四〇
鑑賞の年季　五四
新人の文章（七）　五七
木登り　七二
第二十八回芥川賞選評　七九
簡明に、まつすぐな　八一
人物素描――川端康成氏――　八三
狂言「釣狐」　八八
能面挿話　九一
文章雑談　九八

第二十九回芥川賞選評　一〇四
太宰治の作品　一〇六
飛騨高山の今昔　一一二
秘曲「サギ」　一二〇
偶感　一二三
私の読書遍歴　一二五
今年の鮎　一二九
文学と将棋　一三一
元日の俳句　一三四
私の生活　一三七
能のけいこを見る　一三九
八十翁の能　一四七
新語、隠語に関して　一五〇
第三十回芥川賞選評　一五三
子規句集を読む　一五五
「麦と兵隊」など　一六七
海ほほづき　一六九
私の釣つた魚　一七四

志賀さんの絵と書　一七九
奈良にゐた頃　一八二
俳句の面白味　一八四
志賀直哉ベスト・スリー　一九八
第三十一回芥川賞選評　二〇一
なづみ過ぎる　二〇三
古い能面について　二〇六
芥川さんの俳句　二〇八
『碧梧桐句集』解説（角川文庫）　二一四
碧梧桐の書　二二二
追羽子　二二四
定型と自由律と　二二八
生活の危機の時に　二四五
第三十二回芥川賞選評　二四八
『土以前』を読む　二五〇
ぴつたりした素材　二五二
装幀のことなど　二五四
『虚子自伝』評　二五八

書道博物館を見る　二五九
大会（能）　二六二
お産　二六六
海紅堂昭和日記の解説　二七〇
職務と信用といふ事　二七四
深山の花（柳蘭など）　二七七
馬瀬川のアユの味　二八〇
アユの友釣風景　二八三
初孫について　二八六
偶感、予感、共感など　二八九
志賀さんの作品　二九二
第三十三回芥川賞選評　二九四
加能作次郎について　二九六
「秋ふかき」の句について　二九九
斎藤茂吉再読雑感　三〇二
飛騨高山　三〇七
第三十四回芥川賞選評　三一二
古典の美しさ　三一四

味はひ深い好随筆　三一五
志賀さんの文学　三一七
雑感　三三〇
年魚・香魚・囮　三三三
乳児素描　三三六
狂言の面白味　三四一
第三十五回芥川賞選評　三五二
歌と俳句との間　三五四
痔の手術　三六二
写真とその思出　三六八
記録映画と劇映画　三七五
釣場の風景　三八〇
虚子句集を読み乍ら　三八三
川崎九淵讃　三八七
みなもと近く　三九三
原稿を読む（一）　三九六
第三十六回芥川賞選評　四〇〇
灯蛾　四〇二

二人の異色作家　四〇六
原稿を読む（二）　四一一
編集後記　四一五
口絵　著者（昭和十六年）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

随筆　三

気多川と天竜川

浜松の友達にさそはれて、天竜川の支流の、気多川（けたがは）といふ川に、鮎釣に行つた。昨年の八月中旬に行つて、遠州秋葉山といふ名所の傍の、犬居（いぬゐ）といふ在所に二晩泊つたのだが、川がきれいで、筏（いかだ）に乗つたりして、面白かつた。当時の思出を雑と記してみる。

私は、このあたりは初旅で、浜松のS眼科病院の院長のKさんが弟さんと二人で、私を案内してくれた。浜松から午後二時半の犬居行といふバスで、犬居まで二時間かかると云はれた。バスの窓から左手に三方ケ原の台地を見ながら北の方角に向つて行つた。鹿島（かしま）といふ所で、天竜川の大きな橋をわたつた。天竜川はうす濁りの流れに帆舟なども見えた。二俣（ふたまた）といふ町は、天竜川に合さる枝川が城の堀のやうに見えて、町は要害の山に囲まれて暑くるしい所に見えた。二俣の町はづれからバスは、小川に沿つてさかのぼつて、段段に山中のけしきになつた。私は、鮎は山中の魚だから浜松あたりから茲らの山坂に来て、成程鮎釣にきた、と納得できた。バスは、峠を越して、山峡の村里で、気多川の橋に出た。橋の上から川を見て、私は、わりに磧（かはら）の石が小さいので、茲らはそん

なに大きい鮎が居ないと思つた。バスの終点は、秋葉山の登り口らしい、古びた石段の前だ。秋葉山三尺坊といふのは茲からまだ小一里も山の奥だと云はれた。

犬居町といふのは在所の部落幾つか合せた所で、町の屋並は見えず、私共の泊つた宿屋は、一軒家で、竹やぶの茂つた、離れの二階ざしきに通された。K院長は好い眼科医で、茲らの山家の人人も親しみがあつた。宿の主人は裏の川で鮎釣をしてゐると云はれ、私は、夕方五時でまだ明るいから、すぐに、携へてきた釣竿と囮箱と取出して、川に行つた。私は、釣場で囮鮎一尾もらつて、岩淵の肩の荒瀬と流れこみの所で、つづけさまに六七尾、二十匁二十五匁位の鮎を釣つた。つづけさまに釣れるので、皆は見物して、東京から上手な釣士がきたやうに、びつくりしてゐた。これは釣が上手なわけではなく、夕方の鮎の喰出しの時間でつづけさまにつれたのだが……。釣れた鮎は、宿の傍の草の茂つた岸に、銭箱に似た活かし箱にいれて、小砂利底に浸けて措いた。

宿では、鮎の煮びたし塩焼など出されたが、大きい鮎ではないが、うまかつた。宿は、山家にしては垢抜けした客扱ひでこれは秋葉山といふ名所の宿屋で、旅客も多いせゐらしかつた。東海道五十三次など広重の浮世絵などの旅籠屋風景が、茲に残存してゐるのだと思はれた。夜分蚊が出ず蚊帳もつらず、戸障子も明け放しで離れの二階はしづかで、今晩は爽かな月夜で、窓から、山の上の月明りを看ながら眠つた。

翌日は、朝七時に橋の下から筏が出る、その筏に乗つて、一里程川下に行けば、余り人が釣らないから沢山釣れると云はれて、私は、筏乗りも初めてで、試してみることにした。K院長は病院の患者があるので初発のバスで浜松に戻るので、弟のSさんが私の世話をした。筏の出発の時、Kさんは橋の上から見送つたりした。

筏は、五つ六つ組になつて川を下り、各各の筏に筏師は二人づつ乗つて、気多川から天竜川に出て、二俣まで下るのだと云はれた。筏は材木を藤蔓でゆはへてあるが、固くゆはへたものではなく、広い流れでは材木が幅広

くひろがる風に、岩礁の淵や樋に似た激流では、幅が縮まつて材木が一束になる風に、伸縮自在に、藤蔓でゆるくからめてあつた。それで、筏に乗る時下側の堅の材木に乗ると材木がすうつと沈んで乗れないので、上側の横木の上に渡した材木に乗るやうにと指図された。私共は、囮箱に鮎を活かして持つてゐたが、囮箱は材木に結びつけて流れに浸けて行くと、材木の筏の伸縮で、浮上つたり箱がいたむから、筏の上に囮箱はのせて、水を時時とりかへたらよいと指図された。筏師はこの川筋で鮎のよくつく釣場も説明したりした。私は、筏師の親切からこの土地の人気のよいのが分つた。筏の上から風景も見廻しながら下つて行つた。茲らの沿岸は、両方共山つづきで、右岸に細径があるが、人家も見えず、只閑寂で、川は水が澄透つて小石をしき詰めたやう、庭園か林泉かと見える位に美しい流れがつづいた。

日掛といふ在所の川原に、筏から降りて、川上に向つて釣りながら戻ることにした。

日掛といふ在所では、網打ばかりで、友釣はやらぬと云はれたが、大方小石底だから、網打の方が沢山とれるのだとわかつた。

私共は一向釣れず、茲らは岩附の鮎も少ないやうで、茲はあきらめて、川を徒渉して、川伝ひに、犬居の方まで戻つてきた。

昨夕つづけさまに釣れた宿屋の裏の釣場では、正午頃一尾も釣れず、犬居の橋の方には友釣の連中が幾人もゐたが、鮎は二十匁以下で小さかつた。

私は夕方までに十五尾程釣つたが、この程度では仕方がなかつた。

天竜川の本流の方は、鮎が大きいと云はれ、Sさんは、気多川との合流点の上の、雲名といふ在所の釣場も知つてゐると云ふので、次の日は、亦筏に便乗して、合流点まで下り、天竜川の雲名の方に行く事にした。

次の日は、稍寝坊をして、七時に橋の下から出る筏には乗りおくれたが、未だ上流から下つてくると云はれて、それが来たので呼止めて、うごいてゐるのに飛乗つた。

あわてて沈む材木に足かけて乗つたので、私もSさんも二人共ずぶぬれで、荷物もぬらしたりしたので、筏の上で素裸になつて、荷物もひろげて乾かしながら、行つた。

昨日来た辺より尚一里半程下流の、平坦な小砂利川に、友釣連中が何人かゐたが、それは土地の人でない、都会風のいでたちに見えた。

私共は、合流点で筏と別れて、天竜川の渡船場に行つた。

半濁の急流に針金引張つた、山峡の渡船のけしき。対岸の崖の上の街道に出て、Sさんの云つた雲名の方の釣場に行つた。そこはひろい荒瀬で、石も大きくすばらしい釣場だが、水垢がうすく、残り垢はナメあとが見えるが、半濁の川は、出水の荒れがまだ、回復しないらしかつた。

私は大分持歩いた囮鮎つけて、引ぱり廻して、一尾釣れたが、あとは一つも掛らず、茲でやめて、雲名から午後のバスで浜松に引揚げようと思つた。そこへ、広い川原の方から老人の釣士が一人で来た。それは静岡の釣士で、茲らにはよく来て馴れてゐる風で、天竜川にも新垢がついた時分と考へて来たが、未だですか、と話した。私は囮鮎を一尾分けてあげたら、老人の釣士はその囮を持つて上手の瀞の所に行つて、一尾釣つた。一尾だけであとは釣れず、それで、今晩は渡船場の傍に泊つて、明日は気多川に入つてみよう、と話したりした。先程、気多川の下流の小砂利川に、都会風の友釣連中がゐたのは、天竜川の本流が、未だ荒れて釣れないので、枝川に入つたのだと分つた。

そして私は、下流の小砂利川よりも、未だ犬居あたりの方が、ずつと宜かつた、と考へたりした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com